飯倉だより

（トルストイの『モウパッサン論』を讀む）

島崎孝子

トルストイの長い生涯の中でも千八百八十一年あとりを特別な時代で、彼の内部に起つて來た人生觀の改造をそのまゝ時代に行はれたことがゝ、彼自身によつて語られてあ

特別
文庫14
A169

る。

トルストイの『モウパッサン論』その後も書かれたものど。あの『アンナ・カレニ』ナ』あぞをあけて見ると、そこは人生の悲劇をめぐる幾多の人の心が書きあらをしてある。作者は何人の心もよく入って行って居る。すこしも解決を急いでどやうゐ痕がゐい。あの『アンナ・カレニナ』の作者は、それまで全力をそゝいど前半生の藝術上の仕事が全く以前の價値を失つとやうは見えて來と

2級

とりあは、容易ゐ心の出來事とも思をれゐい。それはしても、近代人の生活といふものを知り悉しとトルストイほどの人が、あの晩年の單純で頑ゐ道德説あぞは果してゐからの満足を感じ得られとらうか。これを私は取つて長い年月の間の謎であつと。隨いてトルストイの『モウパッサン論』の中は書いてあることも、長い間の疑問として私の心は残つて居と。

それよりかうをうずあの『モウパッサン論』を私の好きなものでいかう二十年ぢかい前に初めてあの論文を讀んだ時から、忘れがたい印象をうけた。それから數年の後、浅草新片町の舊居に移り住むやうに成つてからも、幾度となく私をあれを讀み返して見た。

多くのすぐれた藝術家あり思想家ありは出發点に於いてすぐれて居る。中にもトルストイを好いた理由とこころから出發した

3級

3

トルストイの長い生涯を思ふと殊にその感じが深い。私をあの若いトルストイによつて書かれた『コサックス』の物語を今ごろ忘れることが出來ない。晩年のトルストイの過酷なくらゐ嚴格な道徳説に時に私を僻易させどしい彼の『藝術論』――チエホフをして、トルストイをあなりに世の末を見過ぎると言をしめたとりわけ彼の『藝術論』に感服したことがあつたことが、それ

しと

こと

随分多

でも猶私がトルストイを愛する心の変らぬ
ことゝ思ふのは、一つは若いトルストイの出
發点が忘れられぬ為で、あの『少年』や、
『青年』や、『コサックス』などから受ける
好い印象が何時でも私の上に働いて居るから
であると思ふ。

このことは彼の『モウパッサン論』の場合に
も言へる。どんなあの論文の中に書いてあ
ることが疑問として私に残らうとも、それで
も私が幾度となく取出しては讀むことの好き

佛蘭西の旅に行く時も、私を長いこと自分の
手許にあつた英譯の『モウパッサン論』を旅
の鞄の中に入れて行つた。私が三年ぢかりも
暮して見た巴里は曾てモウパッサンのやうな
佛蘭西の作家の物を書いた都會であり、私の
旅窓の外を往來する男や女も、あの佛蘭西の
作家の書いたものゝ中に出て來るやうな人達
であり、私の客舎のあつたポオル・ロワイ
アルの並木町を公園一つ隔てゝモオパッサ
ンの時代に繁華な町であつたといふサン・ゼ

ルマンの通りは續いて行って居と。私をあの旅窓で、『モウパッサン論』を書信州の山の上でも讀み東京の新浅草でも讀んだ『モウパッサン論』をあの旅窓で取出して、それを書いたトルストイの心持を辿って見るよよかったと。

○

近頃はあって、漸く私は長い間の疑問を釋く時がやって來たやうな氣もする。私が一度

トルストイの藝術論は僻易した時の最初の印象を、それが先入主となって、二十年も私の上に續いてゐたと自分ながら氣づいたと。それで私をもう一度『モウパッサン論』を讀み直して見る氣になったと。

トルストイ『ツルゲネエフの訪問を受けて』『メエゾン、テリエール』と題する『佛蘭西書』を勧められたことから、あの論文を始めてある。その時、ツルゲネエフは『ある若い佛蘭西の作

ある若い佛蘭西の作家の手紙から

居

くやうな成つ

家』の書いたものとしてその佛蘭西書をトルストイは勧めたとある。あの初のところを、『すつかり讀んで見たまへ、あか〳〵悪くあい』とツルゲネエフが心易い調子で話しとらしいことや、この作家をツルゲイニンの型を思出させる、あかゝしつかりしたところがある、のみならず婦人との関係を於いてすらツルゲイニンを思出させるとのみや

ツルゲネエフの言つたことや、さうゆう話を聞いても興味も持たあかつたらしいトルストイ自身の心持あぞが

（千八百八十一年は）

あの二人の露西亜の文学者を眼まあらをしてある。それだかりであく、婦人は関するモウパッサンの行ひは就いて、驚くべく信じがたいやうあことをで聞かされたと、さもが〳〵しい調子で書出してある。

私を二人の露西亜の文学者を眼は見るやうあ心持であの初のところを讀んで行つと。ツルゲネエフの方であれ〳〵しく話しかけれぞ話しかけるほど、トルストイがそれを迷惑顔

7 級

は聞いさやうあ、さめて行く友情の冷とさが紙の上は浮んだ。このトルストイの冷淡を何から来ととりわけ、彼の内部は起りかけて居と激しい嵐から来て居と。丁度ツルゲネエフの訪問を受けて初めてモウパッサンの作物を手はしと頃を、彼が藝術は對する疑ひの最もをげしくやつて来と時代であつと。『どから、私をツルゲネエフの勸めて呉れとやうあ、こん作物はを全く興味があかつて来て呉れとものどから、と。でも折角持つて来て呉れとものどから、

その人を悦ばすとめは讀んで見と。』これほどトルストイが心の変り方も、苦しみ方もひどかつと時代だ。しかしその佛蘭西書の中はある最初の小説、『メエゾン、テリエー』を讀んで居る中は、不都合きはまる題材が扱つてあるは関らず、作者の天才を認めあいとけはいかつとと正直は言つてある。

トルストイの『モウパッサン論』はこの作者の天才を認めとところから出發する。彼をま

ことの藝術の性は欠くことの出來ないものとして三つの性質を挙げた。第一、作者と題材との正しい關係、則ち道德的な關係。第二、表現の的確と美（このこつは一致する）。第三、誠實、言葉をかへて言へば、扱れと題材とに對しての愛憎の偽りなき愛憎の感情。トルストイは言をせると、この三つのうちでモウパッサンは第二と第三とがあつて、全く第一のものは欠けて居る。そしてトルストイは露西亞の百姓のやうな率直でもつて、モウパッサンとは自己の描いた題材とに對する正しい關係、則ち道德的の關係をあかつとりの論斷を下して居る。

しかしこの『モウパッサン論』はトルストイが晩年の『藝術論』とは違ふ。同じ道德的な色彩の濃い論文でも、書かれた氣持とは可成な時の隔りのあることが感じられる。こうをあの『藝術論』はあられて居るやうのやうな作者と題材の道德的な關係が正しく明かでないものを一概にデカダンスとして

ふさびしい
てからうて
が
のは
うちで

排斥するやうな性急な人を居ない。こゝは
ワグネルの「タンホイゼル」を終りまで聽
くに堪へないものとして、音楽會場から飛出
しとゝいめほど一克な人も居ない。トルスト
イの内部にある藝術家と道徳家とが、二人
あがら私達の前に眼を浮ぶ思ひのするのが
「モウパッサン論」など。彼を「ほめてもほ
めてもほめきれないやうな調子で、

前よりあらされて來る

の藝術と

9 敏

彼を「ほめてもほめてもほめきれないやう
な調子」で、他のものゝ眼をを映らないやうな
事物を直覚する注意力がモウパッサンにある
ことを言ひ、自己の言をうとするものを明白
に簡素にしかも一種の魅力をもつて語り得る
美しい表現力がモウパッサンにあるひことを
言ひ、それだけでなく作家に誠實な力がな
かつたら藝術は何の効果も生じないのに、モ
ウパッサンにそれ誠實にあると言つて、こ
れほど熱心で率直な素質をもつた人を天才の

あ力を生れながらの素質

生れながらの

天賦の才能と考へあいとけまはいかあいと褒めちぎりてある。それを讀んで行くと、モウパッサンのことだかりでなくて、トルストイ自身の持つ天才的あ力は引き入れられる思ひがする。『モウパッサン論』の忘れがたいのは、さうりめトルストイの美しい性質がいかもよく溢れて來て居るところはある。トルストイは、かとくあゝ人ではあい。

トルストイはツルゲネエフから貰つと本から『メエゾン、テリエー』の中の『モウパッサンの短篇を讀んど。讀む作も、讀む作も、彼の前まはいかは男が女は通じ、女が男は通ずるかといふやうあことだかりを書いたものが出て來と。『ポオルの妻』と題しと短篇あぞはあると、作者の態度を無関心あぞかりか、どうかすると嘲笑をもつて、獣でも描き出すやうは田舎の勞働者を描いてある。かうトルストイをモウパッサンの

てある。

論じ

外

思をずト

短篇は就いて、トルストイは言をせると、勞働者の生活と興味を理解する力の欠けて居ることで、さあが、ら牢獄で、あるかのやうな彼等勞働者を書きあらをすことで、近時の佛蘭西の作家達ほど酷しいものをない。モウパッサンも矢張そのなかで中の一人は世れて居ない。そこみは、きなりで鈍い獣のやうな人が描かれる。人をそれを讀んで、唯笑へるばかりだ。もとより佛蘭西の作家等を自國の民衆の性情は

勞働者

とりふこ

通じて居る筈だ。しかし、それを讀むものが露西亜人で、佛蘭西の百姓と一緒に住んで見ることはないなでも、佛蘭西の作家の描き出過ぎて居ることを確言するこ、決して佛蘭西の百姓のそんなものでない。とをこころは確言することは出來る。どからあの「土」（ゾラ作）のやうな小説や、マウパッサンの諸短篇は書いてあることは信じられない。丁度、土塁が高くて立つて居る美しい家屋の存在を話されても、そんな話の信じられない

のと同じと。作家は唯物質的方面からのみ過まつと理解をして、事物の要素である精神的方面の最も大切なところを全然閑却すれば、こそ、さうしと藝術上の見地より大きな誤りを生ずるのだ。

これがトルストイの初めてモウパッサンの短篇集を手にしと時の感想であつと。一口に言へば、ツルゲネエフの勧めて呉れと若い佛蘭西の作家も、結局彼をどうでもよかつと。どうして天才のある人達が、こんな無駄な骨折をするのだろう。それを彼をツルゲネエフにも話しと。その後、彼をモウパッサンのことをすつかり忘れてしまつと言つてある。

（以下次号）

飯倉だより

（トルストイの『モウパッサン論』を讀む）

二

島崎藤村

トルストイがモウパッサンの短篇を一変を最初の印象を最初より手ゴしと場合を、前より述べとやうなツルゲネエフへの義理一遍より、

いや〜読んで見さやうおものであつと。
ころが、このトルストイは彼の意見を変さ
せるやうな面白いことが起つた。時が来と。
それを彼がある人の勧めでモウパッサンの
『女の一生』を読んだ時からであつと。あの
『女の一生』を読んでから、彼をモウパッサ
ンの名の署してある作あら何でも読んで見る
ほど興味を持つやうな成つた。
中ン論』の中は書いてある。
トルストイが『女の一生』は就いて読後の感

つと言つて居る。

らしい。と

傑

とぶは

2

獨特の

を記述しとあとりを、あの論文の中でも最も
楽しい頁の一つだ。
『女の一生』をすぐれた小説だ。ひとりモウパ
ッサン作中の最傑作とるのみあらず、おそ
らくユウゴオの『レ、ミゼラブル』以後、最
佛蘭西小説中の最も良いものであらう。
トルストイの口から斯うしと感嘆の言葉
が出て来るやうなつと。彼をほめても、ほ
めてもほめきれないやうな調子で、天才の
著しい力がその書の中は感知し得られること

「女の一生」

を言ひ、そこは作者の描かれと人生とは全く新しい姿相を著取する作者の力のあることを言ひ、まことの藝術の作品は欠くべからざるものとして彼の数へと三作品の性質を殆んどそれが同じ程度で『女の一生』は結びついて居ると言ってある。彼をとざ〳〵『自分の見るところでは』といふ言葉まで添へて、形式の美をしさから言ってもこれほど高い調子の完成は達しをいかある他の佛蘭西の散文家よりしても達し得られあか

つさものど。までで言ってある。作者は愛すべきものを深く愛し、憎むべきものを深く憎んでこの作を成して居る。そこがこの物語の中の作中の出來事も人物もすべてlife-like で忘れ難い所以である。とも言ってある。

『女の一生』は、最早彼が最初は手はしと作物かゝモウパッサンを想像しさやうあ人とは善悪の差別を知りもしあけれど又知らうとも思をあいやうあ諧謔家であかつ

る、
あ
を

と。

一個の真面目な人として彼の眼は眼じと。深くも人生を探り入りて、そこに自己の道を發見し初めて一個の真面目な人として彼の眼に映じと。

○

『女の一生』についで、トルストイの讀んだ次の小説は『ベルヽアミイ』である。つとこと が、『モウパッサン論』の中に出て來る。『ベルヽアミイ』はをあそど曖昧な書物ど、

トルストイは言いて居るが、それでも彼を大体に於いて『女の一生』と同じやうな、真摯な人生觀と感情との底を流れる作と見て居る。『女の一生』では、彼を作者の代りとして共に落させられたらう、その深因を何處にあるのだらう、と問をうとして居る。それから又、『ベルヽアミイ』の方では、彼を作者と共に一切の清くて善良なものは私達の社會に於いて滅びつゝある、何故と

りめなこの社會が腐爛して、不健全で、恐ろしいものであるからである」と答へようとして居る。彼をあの「ベル、アミイ」の終の章の骨を刺すやうな結婚のくだりを挙げて、作者の意圖が驚くべき力で迫つて來るといふ風なし言つてある。

濁

と。

しかしトルストイは「ベル、アミイ」以後のモウパッサンの長篇小説は失望しと。それを彼は作者が人生に對する道德的關係の混濁なる歸しの生の現象を理解する力は「モ

ン・トリオル」のあとりの作はあると漸く動揺し始め、最後の長篇「ノオトル、カア」ルでは全くその力が朦朧としまつと言つてある。トルストイは言をせると、「モン・トリオル」を讀む者を作者の意圖のいづこにあるかを知らあるは苦んでしまつ。作者はあの小説の主人公ポオルの生活の一切の空しさ卑しさを示さうとして居るのか、それともあの主人公のやうな生きるとりことの奈何なる愉快で容易であるかを示さうとして居

らあい。

が

ものと成つて

るのか、その差別を知るは苦しむ。これを明かは作者の冷淡と、焦燥と、作りすぎとのと、就中人生は對する作者の正しい關係の欠乏を語るものであると。

○

これほど『モウパッサン論』は作者は道德を求める心が強い。私をずつと以前はあの論文を讀んで見と時から、トルストイの求めるものは就いて種々ふ疑ひを起すやうな成つ

と。假りに『女の一生』の作者が道德的な意圖をもつて最初からあの稿を起しとしたら、居て、それで稿を起しとしたら、あの作はずつとの効果を奈何なものどう。モウパッサンは天才の誠實があつと。その誠實はトルストイをして『ユウゴオ』の『レ、ミゼラブル』以後第一の作佛蘭西が生んだ小説の最もすぐれたものであるとまで感賞せしめと。まことの藝術の作品を成し。それで澤山でなあいか。モウパッサン

が最初から

が

ほどの

た、

が最後の長篇で『女の一生』ほど人を動かす力がありとしたら、それを作者の精神の衰へは歸すべきで、人生の全い姿は滲透するところまで作者の力の至らあかつとからではあからうか。強いて作者は向つて、それほど道徳を求めるべきであるどらうか。

斯うしと疑問が、以前あの『モウパツサン』論を讀む度は、私の胸起りしと。

と。

一体、モウパツサンは唯如實なこの人生の姿を描いと人どらうか。もし佛蘭西は寫實純あ感じのする寫實家を求めるあら、バルザツクあどこそその人でをあからうかと思ふ。バルザツクの創めと文學を隨分混り氣の多いもので、いろ〳〵あ分子が包まれて居るやうあ氣しするが、その煩瑣で複雑で、幼稚とし言へを言へるほどの初期の寫實的あ文學の中から清い源泉の流れて來て居ることは否まれあい。バルザツクの書いたものは何とあく露西亜の方は興つと寫實的あ文學と共通す

北の歐羅巴の

とりふ

よく

るものがあるやうに思ふ。あのドストイエフスキイがバルザックに負ふところの多かつたといふのに不思議はない。そこへ行くと、フロオベエルやモウパッサンの創めたものは違ふ。作家としてのモウパッサンが現實に肉薄する力の奈何に破壞的であるかを、バルザックあとりに比べて見るとよく分る。モウパッサンの態度を無關心かも知れないが、その無關心は詛刺か皮肉であけれど目的を達し得られないやうな悲痛な無關心。試みに『女

性質のもの

は深刻な

の女

の一生』の主人公のやうな清い善良な婦人が奈何なる無慚な位置に立たされ、『ベ』ル、アミイ』の主人公のやうな男が『の世の勝利者であるかを味ひ見るならば、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。寫實家としてモウパッサンがバルザックのやうな素直な寫實家でないことを考へるものを、どうして彼の濃い厭世觀を見のがすべけんやいかない。

奈何なこ

を表現の

を取つて

ユウゴオから、フロオベエルは時代の多くの佛蘭西人が自國は失望する心を、實は佛蘭西革命の悲惨な結果は胚胎するといふ。ブウルジエの『現代心理論集』はその邊の消息が傳へてある。より好き社會を實現しようとして企てられた舊い社會の破壞を、反つて意外な決果を人の心は齎した。多くの佛蘭西人は自國は失望して、遠い國外の空へと憧憬の心を馳せやうとした。彼等の心は英吉利か

ら獨逸へ、獨逸から西班牙へ、その他遠く印度や支那の東洋の空までもさまよつた。彼等は精神の飄泊者であり、思想の旅人であつた。これが佛蘭西のエキゾオチズムであつて、その影響するところはひとり文學の上ばかりでなかつた。さう思つて見て來るのみ止まらずして、政治にも、教育にも、宗教にも、何一つと、政治にも、教育にも、宗教にも、何一つ心を満すに足りるものはなかつたとやうなフロオベエルのやうな作家の生れた當時の社會の空氣も、その空氣の暗さも想ひやられる。

フロオベエルの創めと文学は實は彼の苦悩と反抗的な精神とから出發したとかの趣があ
る。そしてモウパッサンをこのフロオベエル
を師とも友ともしたと人ど。トルストイがその
トルストイの『モウパッサン論』があの佛蘭
西の作家の暗い人生觀に觸れるところの少い
のは物足りない。モウパッサンを唯如實に人
生の姿を描いた作家とのみ言はれない。モ
ウパッサンを『真』を追ひ求めて『幻』を
得と人ど。高級な寫實家を、要するに幻想的

『モウパッサン論』は、作者の人生に對する
道徳的關係の欠乏のみを言つて、何故にさう
いふ關係を無視するほど暗いつと作者の内部
に觸れる。ところの少いのは物足りない。

こんなことを的に浮べながら、私をあの論文
を讀みつづけた。
トルストイは、何故に『女の一生』の作者が
生の現象を理解する力の次第に低落して行つ

混濁

反抗的であ

主觀

者

とかを尋ねて、それを主な外的な原因に歸して居る。彼をモウパッサンの流行作家として世は認められるやうに成つてから明かなる確かなその混濁が始めつとのざと言ひ、いかある名高い作者でもさういふ誘惑の犠牲となり易いのは、なしてモウパッサンのやうなチヤアムのある作者のことゞ、といふ風に言つてある。彼を言葉を継いで、一方には最初の長篇小説の成効があり、新聞雜誌の許判があり、社會、殊に婦人の阿諛があり、一方

なを出版業者の要求と強請とが作品の如は作品の價値を尚ふよりも作者の名が署名がありさへすれば好いといふやうな出版業者の要求がある。かうしと誘惑をモウパッサンのやうな作者を驅つて、作中の人物の愛すべきものを愛し憎むべきものを憎む心を失せ、とゞまつて氣に入つとか入らないとかの出來心で筆を執らせるやうに成ると言つてある。

トルストイは又、「ベル、アミイ」を書いと

の酷しい

そのものを

むとりの

後のモウパッサン自想像のことを言って、當時は起って来た新説の支配とめは支配せられとのどといふ風に見て居る。その新説とは、まよは藝術は正と不正との明かな概念を不必要とするばかりでなく、寧ろその反對に、藝術家を一切の道德的な問題を度外視しなければ成らないと主張するのだ。まあ。その説を主張する人は隨へば、藝術は如家は如實にこの生を再現すれば足りるのだ。美感を満足させれば足りるのだ。何が道

いめ

德的で、何が非道德的であるかといふやうなことを思考するのは、藝術家の仕事ではないのだといふに歸着する。美の尊重、殊に婦人の肉体美の尊重などがそこから起って來る。モウパッサンの周囲にある藝術家仲間――畫家、彫刻家、小説家、詩人が、さういふ説を主張しとばかりでなく、來るべき時代の教師たる哲學者までがそれを主張した。かうトルストイは言つと後で、名高いルナンのやうな人が婦人美を解しないといふことの

とめは基督教を非難しと言ひ、『基督教起原史』中の一節を引いてそれを証拠立てようとした。

そこでトルストイはモウパッサンのとめは斯う言つて居る。もしモウパッサンが普通の肉慾小説を書く才人あら、その作品は周囲の人達の主張のとめは全然支配されてしまつさかも知れない。けれどもモウパッサンは天才があつと。彼は要素から事物を見と。ざから無意識のうちは真理を發見しと。それがモ

『女の一生』の作者

ウパッサンの作品を見ると、作者の同情が絶えず動揺して居て、ある時は正しくないものを正しいとしとり、ある時は正しいものを正しいとしとりして居るが、その理由はなさまこれど。モウパッサンの天才が意識ないし流れて來て居るやう短篇のあるものは、ないと、實はすぐれとしものがあるがある。

と。と言つてある。

讀んで行くと、モウパッサンの天才を愛情するトルストイの心情が紙の上は溢れて居る

やうな思ひをさせる。確かにトルストイには他の長處を愛する美しいところがある。そこがまた、あの論文を讀んで居るうちにさびしい道徳的の批判が加へてあるにも関らず、私の親しみを覚える所以でもある。

トルストイの『モウパッサン論』を終に近づくほど楽しい。今度讀み返して見て、殊に私をそれを感じた。どんな風にあの佛蘭西の作家がトルストイの眼に映じたか、それを知るにはどうしてもあの論文の終まで讀んで見

て後ねばならない。

（以下次号）

飯倉だより

（トルストイの『モウパッサン論』を讀む）

島崎藤村

三

モウパッサンが最後に到達した境地を、私達は取つても興味の深いものである。その一面をより深く實在に滲透しようとする感覚的

斯うした幻想的な傾向をトルストイは全く
つとやうだ。モウパッサンの『水の上』が
深くトルストイの性格の主として
道徳的寂寞をあらはされた面である。

トルストイがモウパッサンの最良の書として
先づ『女の一生』を揚げ、最後に『水の上』
を揚げたのはうれしい。モウパッサン
好むものでも、好まないものでも、おそらく

次へ

このトルストイの意見は一致しないものはあからう。

そこでトルストイがどんな風な『水の上』を書いたモウパッサンを見て居るか（それを）といへば、力強い道徳的成長がそれ（の）文学活動の期間に於いて認められることを言つてある。とゞまる肉的な恋愛を黙（しりぞ）くることが斯の作者の道徳的な成長を意味するばかりでなく、より高き道徳的の要求から作者が人生は（な）訴へと一切の言葉でそれを知ることが出来る

（の最後の）

と言つてある。このトルストイは言はせる。

と、『水の上』の作者をとゞまる男女の性的な肉欲的なアムウルに於いてのみ人間の獣性と合理性との要求の間に横たはる矛盾を見とだかりでなく。作者を實に世界の全組織の上にその矛盾を見とのゞ。物質的な世界は。

（は、到底）

作者は取りて到底最善の世界ではなかつ。と。その不合理、その醜悪、その不調子。作者の理性と愛との要求を満足せしめなかつ。作者をある他の世界の存在を感知するや

うな成つて行つとのごと。トルストイは最も■モウ■パツサンの心を苦しめとものとして、人間の寂寥■、精神的寂寥■の傷ましい状態を指摘しと。この寂寥を驅逐するものは何か。人と人との間の横■とたるこの深い溝を障壁を絶滅するものは何か。■れれは愛ど。■所謂婦人の愛ではあくて、純な靈的な愛ど。斯う自ら■問ひ、自ら答へて居る。そしてモウパツサンの求め■ものも、この■■外ならないと言つて居

れるほど耐へがたいこと

この寂寥が人と人との間を、殊に親しいもの間に見出さるるまでは。

また、

て、一層

る。トルストイは更に言葉を継いで、■『水の上』の作者を自ら求めて居るものに名を與へることが出来なかつと。しかし作者があの恐ろしい寂寥に對して示しとやうな言ひあらをし難い懊悩■さぞ辱ぢかりで發音する千百の説教よも勝つ■更に強く人の心の奥に響くほど誠實なものがあると言つて居る。

『モウパ■ツサン論』より

讀んで行くと、おぼきかねるふしもあいではないが、を

れを卒直のあの論文の末節として見逃せる部分であつて、モウパッサンの生涯の悲劇を叙しとあとりは殊に私の心をひいと。「水の上」の作者の周囲には恐ろしいほど不道徳な空氣があつとのど。その空氣が氣息の塞るほど濃く作者を取りまいて居とのど。ひとりあの作者には天才の力があつて、その異常な光の輝くものがあつて、周囲の世と戦ひ、周囲と戦ひ、殆んど自由な空氣を呼吸し得るところまで近く行つとのど。作者はその戦ひ

の途中で倒れと。のど。そこにはモウパッサンのやうな生涯の悲劇がある。斯の見地から、トルストイはモウパッサンを論じて居る。彼を「女の一生」や「水の上」の作者が終に生涯の悲劇的な危機に到達したことを言ひ、その危機とは彼を囲繞する人生の虚偽と作者の自覚し始めと真生活との間の抗爭の起つと時であることを言ひ、靈的な誕生の初聲がすでに彼に聞かれることを言つて居る。トルストイはあの論文の終のところ

て居る。

作者

に激しい

で、作者としてのモウパッサンの全生涯を振返つて見た。そして、モウパッサンのすぐれた作品の中でも殊に短篇の好いものは書きあらはしてあるのは、それらの生れ出づる悩みであつたといふ結論に達して居る。

『ししモウパッサンがあの生れ出づる悩みの中に死去しあかつたとしたら、あれから更に生れたとしたら、彼は世を益するやうな幾多の大作を私達に與へさらう。しかし彼があの悩みの中で私達に與へさしのどけさでも澤山

私達を道に拘泥し

ど。どから私達を自分等は吳れたものに對しても、この力強い誠實な人に感謝しようでをあいか。』

かういふ意味の言葉であの論文が結んである。

私達をいとずらに末節にあいで、あういふトルストイの論文を讀まねばならないことを知つて居る。どが、道徳家めいたトルストイの

口吻は接すると、その方は煩をされて、兎角私達は末節は拘泥し易い。そして、假りはモウパッサンがあの生れ出づる悩みの中は死去しあかつととしてもあれから更は生れとしても、あのモウパサンの求めとものが果してトルストイの言ふやうなsolutionは満足しとらうか奈何かと言ひとくある。

とゞ抽象的は唱へらるゝ道徳ほどこの世は恐ろしいものをない。さういふ道徳はは何の生命もない。トルストイの言ふ道徳がそんな抽象的は唱へられるものでないことは、いかは彼がモウパッサンの悩みは同感し、「水の上にはあらされて居るやうな人間の寂寞は、精神の寂寞は心をひかれて居るのを見るとでかりでも分る。それどころか、彼くらゐ抽象的は道徳の唱へらるることを恐れと人もめづらしい。彼くらゐ隣人を愛することの奈何は難いかを知つて居と人もめづらしいと思ふ。

的な

か

次へツヾク

きつて居ることだ。それどころか、彼くらゐ抽象的な愛を唱へることを恐れと人もめづらしいのだ。彼くらゐ隣人を愛することの奈何それよりも難しいかを知つて居る人もめづらしいのだ。

それよりも難しいのは、ずつと以前は私をあのウパッサン論にをあけて見る時から、一種の反感をしは讀み終ることの出來あかつとのは奈何りめセけどらう。私をトルストイが天才としてのモウパッサン作品の誠實を認めと

ことは深く心をひかれあがら、その道徳的な文字はいつでも眼をつぶりさかつと。これほどの私の反感を何歳から来るのか。長い年月の間、私はあの「モウパッサン論」の中に書いてあることに就いて、唯疑問として それを自分の心に張して置いた。あれほどトルストイの力説した道徳が果して奈何いふ性質のものであるかゝ、そんなことを考へて見ようとは

さういふ私を、舊い道徳は反抗することゞか

恐ろしい

りを知つて、新しい道徳の曙光さへも認めるこのとの出来なかつたやうな、不幸な時代は成長した。私の周囲のを、真に隣人を愛して見ることもなくて、さぞ抽象的な愛を説くやうなかの多かつた。斯うした人達ほど青年時代の私に反感を起させるものはなかつた。私は他の学友と同じやうに、反抗は継ぐに反抗を以てした。この世の道徳とされて居る時代の聲ほど私に反感を起させるものをあかつた。私を他の学友と同じやうに、反抗は継

聲で満ちされて居

道徳

ぐは反抗を以てしと。心も柔く感じ易かつさ
自分の青年の時代を斯の反抗の中に過ごしさ
ことは、長く私の生涯に影響せずには置かか
つと◎と思ふ。これがえも〳〵トルストイの
やうな人の書いたものを讀んで見る場合にも
も、道德的な見解とさへを一概に舊臭く片
意地なものに思はせ、一種の反感をしに讀
み終ることの出來なかつと根本の理由である。
近代の生活といふものを知り盡したトル
ストイほどの人が奈何してあの道德説に滿足

9

することが出來さうか、と私の心に疑を生
〳〵しと理由もなさそこにある。
しかし私も今度ほどの親しみを覚えたのは
モウパッサン論を讀み返して見ときめし
たない。
モウパッサンの如きを、彼自身の眼をもつ
て、あるがまゝに事物を見、その意義を讀み、
到底他の窺ひ知らざる人生の矛盾を讀み得と

の主張も、
讀み、
もつて
に接する
で

稀な人ど。』
この意味のことをトルストイもあの論文の中
で述べて居るが、私をこの『稀な人』をトル
ストイ自身の内よりも讀まうと思ふやうなつ
と。彼の道徳的肉欲の否定し、基督教的な
禁欲説も――更に言へば、彼の求めとやうな
solutions の一切を、彼自身が自分の身を苦
しみぬいと人生の矛盾と決して別物でないこ
とを思ふやうなつと。

『水の上』を書いとモウパッサンの心――私
を吉江君の譯しとものから、その一節をこゝ
に引いて見とい。
『人々が三十歳もの年配になると、もう総
てが彼等にとつてはおしまひである。彼等を
何を豫期することが出來よう。何も彼等の興
味をひくものは残されて居ない。彼等を吾々
人間の貧弱な快楽の一通りを盡してしまつと
のである。』

この正直な物の言ひ方で、モウパッサンを平凡無味な生活は厭をしい倦怠を味をずよるられる人の幸福であることを言ひ、『毎日同じ家昊の中で、同じ身振をして、同じ仕事を取り掛り、そして同じ地平線の前へ、同じ空の下へ、同じ街路へ出掛けて行って、そこで同じ顔や、同じ動物やを出逢ってるられる人の強さを持つと人』の幸福であることを言ひ、『この少しの変化もしない、そして全く怠屈な事柄を認めて、そして言ひようのな

い忌をしさを味をずよるられる人』の幸福であることを言って居る。恐ろしい倦怠ど。そして『水の上』の作者を最早科学や藝術の愛よもほとゝ何等の興味も持てなかつたらしい人ど。それほど作者を彼自身の中よ幽閉せられ、禁錮せられてしまつと人ど。

とんな生涯の危機が、あの『アンナ、カレニナ』の作者の上よもやって来とか奈何かを私達の害を得る限りでない。それよして七千八百八十一年あとりから以後のトルスト

イが何か全く別の道を歩き出した人のやうな見えて、それまで彼が全力を傾けた藝術上の作品し全く以前の價値を失ふやうに見えて來たと自由して居るのも徹しても、そこには何等かの共通した藝術に對する疑ひが感じられないでもない。

「水の上」の作者が抱いた孤獨の悩ましい恐怖を、あかるく普通のアンニユイといふ言葉ぐらゐであらせないで程度のものだ。

「吾々めいめいを、自分の周囲は空虛を感じ

じ、測り知れない深い底の方で自分の心が鼓動し、思想が閃えて居るといふことを感じ、そして狂人のやうに両腕を擴げ、熱しと唇をして、何人かを抱かうと思つてうろつき廻る。そして彼は、自分が獨りで居るといふことを感じとくないだかりは、知りもしないで、了解もしないで、右は、左は、滅茶苦茶に抱き着く。彼を何人かと握手しと刹那から、斯う言ふやうに思はれる。「さあ、お前をもう俺のものである。お

前をお前自身の、お前の生命の、お前の考への、お前の時の幾分を俺は負ふてゐる。」そしてこれが為は多くの人を、互によく知り合ひしあいで、自分等ごけ友人と思ふのである。……彼等を孤獨で居あいとめはを、何人かは心を向けあくてをらあい。彼等の愛情は、友情としてか、或を恋としてか、貴さあれあくてはあらあい。併しさうするはを、是非ともある孔隙が見出されあくてはあらあい。で、彼等を愛情を語り合ひ、それを誓い

ひ、それは熱狂し、昨夜見いけとだかりのある知らあい心は自分の全心を注ぎかけ、不圖出逢つて悦しさうあ顔をしとある者の魂は自分の全靈を注ぎかける。そして互は結び付かうとするこの惶しさから、総ての意外あ事件や、間違ひや、誤解や、及び人生の芝居やが持ち上る……」

何とりふ寂寞あ精神の光景ごらう。この寂寞から逃れようとして、モウパッサンが自分の心をあぐさめようとしと方面を彼の晩年

い傾向とも見るべき感覚的あ

の

著し幻想である。つまことを想像するは難くない。實は『水の上』一篇を、精神の統一を欲して、それが得られない人の揚げと苦しい叫びだ。

こんな生涯の危機が、あの『アンナ・カレニナ』の作者の上はもやつて來たか奈何かは、それを私の言ひ得る限りでない。それはしても千八百八十一年あとりから以後のトルストイが何か全く別の道を歩き出したと人のやうは見えて、それまで彼が全力を傾けた藝術上の

仕事も全く以前の價値を失ふやうに見えて來たと自白して居るのは徵してもそこまで彼を導いたものは道德的寂寥でもあかつたらうか。と想像せられる。

斯う思つて見て來ると、假令トルストイの赤めて行つた純一なる生活が解決が宗教の奉仕のためにあるやうな狹苦しさを感じさせるにしても、私はそれを世にありふれた道德說と同じやうに考へられないやうにくあつて來た。人世の濁流に投ずる清い源泉とし

を近代の人の心に見出さるゝ

て、あの一見時代錯誤のやうな原始的な宗教の精神への復歸や、道徳の主張や、肉欲の否定や、基督教的な禁欲説などの唱へられと意味を考へずにはをられなくなつて來た。矢張『モウパッサン論』を書いたトルストイは、あの『コサックス』の物語などから出發したと同じ近代の人ど。

私をこの感想で、長い間の謎として自分の心に残つて居た疑問をすつかり解き得たとも思へない。しかし私を今度あの『モウパッサン論』を讀み返して見て、多年自分の抱いて居た反感を忘れて行くやうな成つた。むしろイブセンや、ストリンドベルヒや、それからエレン・ケイの指し示したやうな新しい道徳の方向に結びつけて見て、一見正反對のやうなトルストイの求めたものも、人と人との間の新たな關係、道德的な關係であることを思ふやうな成つた。そして來るべき時代のために序の曲を奏して行つたやうなトルストイの長い生涯をも想像するやうな成つ

この

の位置にある

と。

モウパッサンが彼の作品の最も好いものは、殊に彼の短篇の中に書きあらはしたものは、それらの生れ出づる悩みなのである。

と言つたトルストイの言葉を味ひが深い。

（完）

わが国の続明治文学史下巻口絵所収

53-1714